木嶋真優
ヴァイオリンリサイタル

第Ⅰ部

愛のあいさつ …… エルガー
スペイン舞曲 …… ファリャ
月の光 …… ドビュッシー
イタリア組曲 …… ストラヴィンスキー

第Ⅱ部

鮫 …… ピアソラ
《ポーギーとベス》より〈サマータイム〉〈そんなことどうでもいいさ〉 …… ガーシュウィン
ラプソディ・イン・ブルー …… ガーシュウィン

春

2023 四季のコンサート 40周年記念

2023年4月9日(日) 17:45開場 18:30開演
会場：アクトシティ浜松中ホール
主催：浜松音楽友の会

プロフィール

木嶋真優(きしま まゆ)ヴァイオリン

2016年第1回上海アイザック・スターン国際ヴァイオリン・コンクールにて優勝。
2000年第8回ヴィエニャフスキ国際ヴァイオリン・コンクール・ジュニア部門にて日本人として最年少で最高位を受賞。2011年ケルン国際音楽コンクールのヴァイオリン部門で優勝、あわせてその優れた音楽的解釈に対しDavid Garrett賞も受賞した。2012年春にはケルン音楽大学を首席で卒業。2015年秋には同大学院を満場一致の首席で卒業し、ドイツの国家演奏家資格を取得、2016年秋には神戸市より神戸市文化奨励賞を授与された。
レコーディングは、ウラディーミル・アシュケナージから強い推薦を受け、「アシュケナージ&NHK交響楽団」の"ツィガーヌ"に参加。2020年12月にはキングレコードより新譜CD「seasons」をリリース。
現在日本とヨーロッパに拠点を置き、リサイタル、オーケストラとの共演、室内楽など幅広く活動を行なっている。2002年度文化庁海外派遣研修員。
使用楽器はNPO法人 イエロー・エンジェル、宗次コレクションより特別に貸与されたAntonio Stradivari 1699 "Walner"。

江口 玲(えぐち あきら)ピアノ

東京藝大附属音楽高校を経て東京藝術大学音楽学部作曲科を卒業、その後ジュリアード音楽院のピアノ科大学院修士課程、及びプロフェッショナルスタディーを修了。1992年に大成功を収めたアリスタリーホールでのニューヨークリサイタルデビュー以来、アメリカ、ヨーロッパ、アジアでの主要演奏会場にて演奏を続けてきた。ニューヨークタイムズ紙からは「非凡なる芸術性、円熟、知性」「流暢かつ清廉なるピアニスト」と賞賛されている。
作曲・編曲者としても実力を備えた大胆な解釈と表現技法でリサイタルや協奏曲など国内外を問わず活躍を続けるほか、ギル・シャハム、竹澤恭子、渡辺玲子、アン・アキコ・マイヤース等数多くのヴァイオリニストたちから絶大な信頼を得ている。レコーディングはドイツグラモフォン、フィリップスやNYSクラシックスより多数のアルバムをリリース。最新作はラフマニノフの神髄を描きだした「ラフマニノフⅡ」(NYSクラシックス)。
2011年5月までニューヨーク市立大学ブルックリン校にて教鞭を執る。
現在もニューヨークと日本を行き来して演奏活動を行っているほか、洗足学園音楽大学大学院客員教授、東京藝術大学ピアノ科教授を務める。

© kunihisa kobayashi

木嶋真優
ヴァイオリンリサイタル

©Photographer:KINYA OTA(MILD)

曲目解説

堀内彩虹

●エルガー:愛のあいさつ
愛を象徴する音楽として広く演奏されるエルガーの人気曲。1888年、ヨークシャーで休暇を過ごしていたエルガーは恋人アリスから「愛の恵み」と題した自作の詩を渡され、お礼に短い曲を作ってお返しすることを約束する。その直後にエルガーは〈愛の挨拶〉と名づけた小品を作曲し、アリスの名前キャロライン・アリスをもじって「キャリスに捧ぐ」と添えて贈った。その翌年に二人は結婚し、娘が生まれるとその子は「キャリス」と名づけられた。エルガーは自身の人生と愛で満ちたこの曲を、後に、ピアノソロ、ヴァイオリンとピアノ、オーケストラと編曲し、世に送り出している。

●ファリャ:スペイン舞曲
スペインの作曲家マヌエル・デ・ファリャが1905年に作曲したオペラ《はかない人生》の抜粋曲の編曲であり、現在では独立作品として原作のオペラよりも頻繁に演奏される。ファリャの音楽は故郷アンダルシア地方の音楽、とりわけフラメンコ音楽の影響を受けており、本作品もフラメンコの情熱と自己主張的な激しいリズムで満ちている。この楽曲は原作では婚礼における踊りの場面で登場しており、ヴァイオリン編曲版でも弦の上を跳ね回る弓の動きが原作の趣を体現している。

●ドビュッシー:月の光
原曲であるピアノ作品《ベルガマスク組曲》の〈月の光〉は、ポール・ヴェルレーヌの詩「月の光」から着想を得たとされる。原曲では、静かな月明かりの下、仮装した踊り手が短調の物悲しい音楽に重なるように仮面の裏側で物憂げな表情を見せたかと思うと、その人々も音楽もあっという間に消え去り、霞がかった寂しげな心情がその場に残される、といった掴みどころのない夢のような情景が現れる。月がテーマであるものの、曲において月は決して目立つ形では強調されていない。むしろ、曲の冒頭で示される旋律とリズムのモティーフが曲のいたるところで変奏され現れることが、まるで月の光が曲全体を包みこむように作品の輪郭を静かに浮かび上がらせる。

●ストラヴィンスキー:イタリア組曲
第一次世界大戦前のような華やかな巨大オーケストラ時代に終わりを告げ、ストラヴィンスキーが作曲技法をがらりと変えて新古典主義に傾倒するようになったなかでこの組曲も生まれた。ペルゴレージによるバロック時代の楽曲の原型を保ちつつ編曲し、小編成で、より明瞭な響きと厳格な和声をもった音楽に仕上げている。作品は軽快な序奏で始まり、憂いを含んだセレナータ、心躍るタランテラ、二つの変奏を伴ったガヴォット、ピアノとの掛け合いが巧妙なスケルツィーノを経て、ストラヴィンスキーらしい豊かな色彩感が随所に現れるメヌエット・エ・フィナーレで幕を閉じる。

●ピアソラ:鮫
アルゼンチン生まれのバンドネオン奏者で作曲家のアストル・ピアソラは、タンゴにクラシック音楽の和声やリズムの様式を採り入れた「タンゴ・ヌエヴォ(新しいタンゴ)」を牽引し、二十世紀音楽に革新的な風を吹き込んだ。この作品にはピアソラの趣味だった鮫釣りの経験が反映されている。タンゴはもともとダンス音楽だが、この曲では鑑賞のためのタンゴ音楽を追求するべく、ピアソラは急激なリズムの変化や不意をつく休止などを盛り込んだスリル満点の音楽で鮫との格闘を表現している。

●ガーシュウィン:《ポーギーとベス》より〈サマータイム〉〈そんなことどうでもいいさ〉
1920年代のアメリカ南部に暮らすアフリカ系アメリカ人を描いたオペラ《ポギーとベス》は、過酷に生きる人々の境遇を、ジャズ、ブルース、ゴスペルといった黒人音楽の要素をたっぷり盛り込んで力強く表現する。子守唄〈サマータイム〉では、貧しさに耐える困難が歌われたかと思うと、次第に子どもという存在が示唆する希望へと曲は移り変わる。この楽曲はオペラ全体を貫く通奏低音のように作品中に何度も歌われ、苦悩と希望の交錯を象徴づける。〈そんなことどうでもいいさ〉では、聖書の内容を批判する背徳的な場面を陰鬱と自由さが同居する音楽が支え、ヴァイオリン版では弦楽器のうなるような音色がそれをさらに強調する。

●ガーシュウィン:ラプソディ・イン・ブルー
人気テレビドラマ『のだめカンタービレ』のテーマ音楽として一躍有名になった本作品は、その登場もまた商業性とクラシック音楽とが交叉する場においてであった。1924年にニューヨークで開催された演奏会「近代音楽の実験」で初演されると、商業音楽の代表ジャズとクラシックの象徴オーケストラとが融合する音楽に人々はすっかり魅了された。この曲は楽器のさまざまな演奏効果をより合わせた、まさに「実験」作品であり、あまりの奇抜さに退屈していた聴衆が目を覚ましたという逸話もある。冒頭は有名な低音からのグリッサンドで始まり、気怠い旋律が行きつ戻りつしたかと思うと、ジャズのリズムにのせて賑やかに音楽が急拡大する。鼻声風の音色が印象的な演奏効果をさし挟みながら進行し、最後はアラルガンドで独特の余韻を残して終わる。

ほりうちあやこ(音楽学研究者/音楽評論家)

★演奏曲目の変更「ストラヴィンスキー：イタリア組曲」→「プロコフィエフ：組曲ロミオとジュリエット」より前奏曲・少女ジュリエット・騎士たちの踊り・バルコニーの情景・マーキューシオ・決闘とティボルトの死★
★アンコール曲★
ピアソラ：アヴェ・マリア、クライスラー：愛のよろこび、
ワーグナー：アルバムの綴り、モンティ：チャールダッシュ